

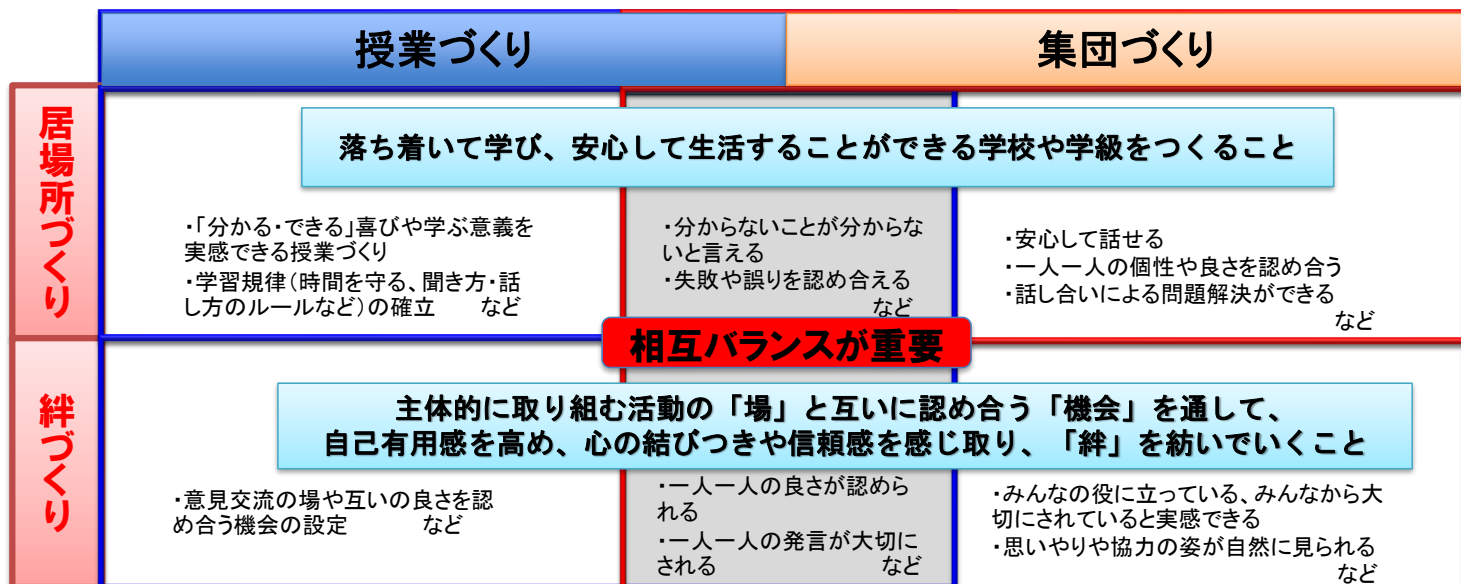
(別添) 「欠席日数調査表」活用ガイド①

魅力ある学校づくり～不登校・いじめの未然防止のために～

不登校という事象に対して学校がまず取り組むべきことは、全ての児童生徒が学校に来ることを楽しいと感じ、学校を休みたいと思わせないような、日々の学校生活の充実です。どの児童生徒も落ち着ける場所をつくること(居場所づくり)、全ての児童生徒が活躍できる場面をつくること(絆づくりのための場づくり)が鍵になります。

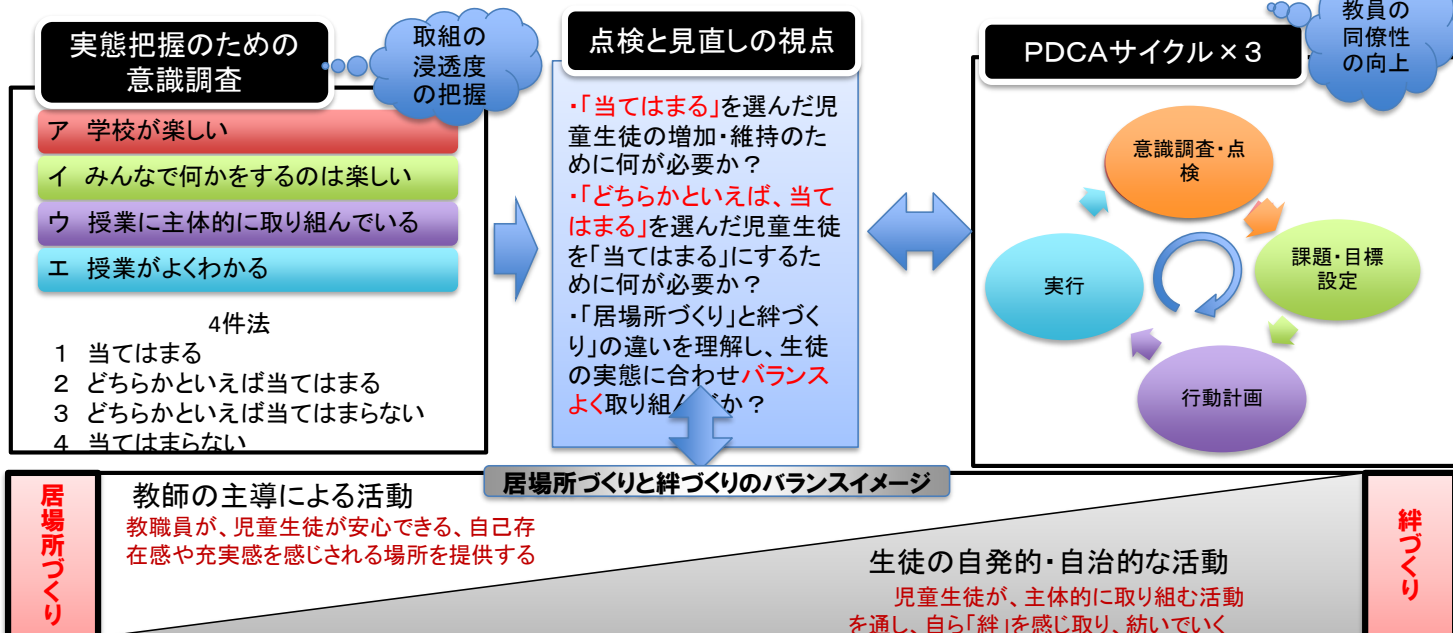
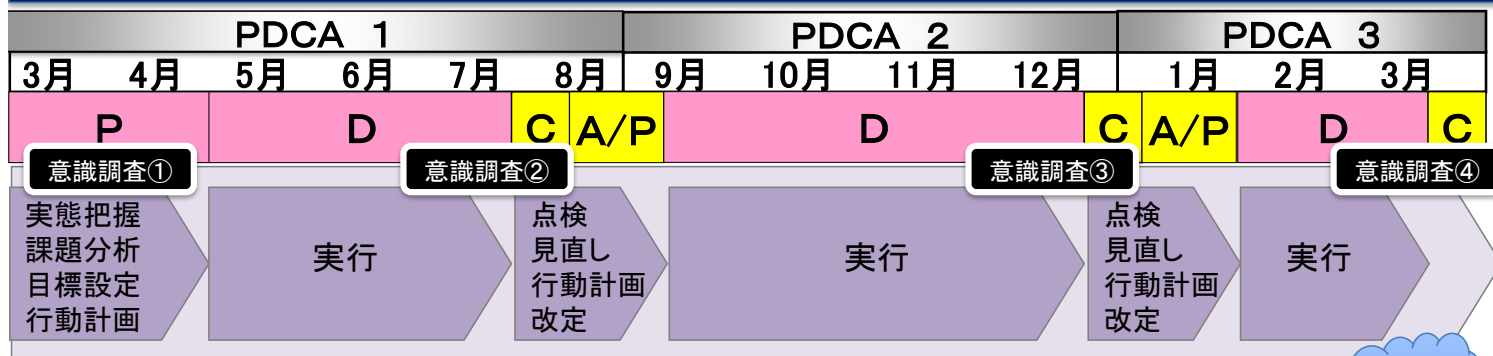
(国立教育政策研究所「生徒指導リーフLeaf.14 不登校の予防」より)

観点	取組の視点(対象)	主たる取組
未然防止	全ての児童生徒	集団指導



(別添) 「欠席日数調査表」活用ガイド②

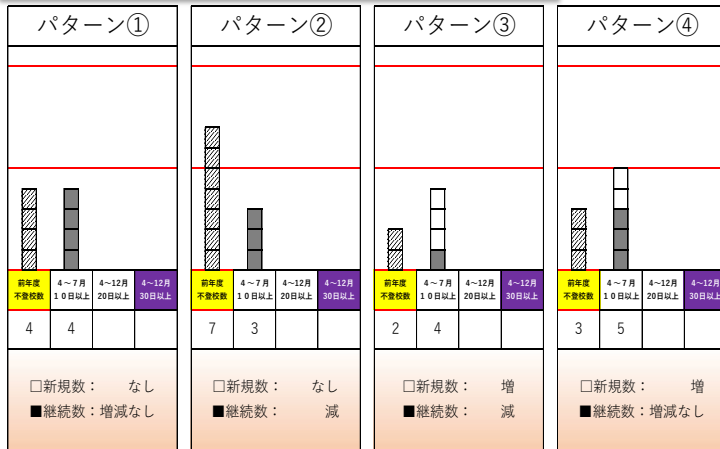
PDCA×3＝不登校・いじめの未然防止



(別添)「欠席日数調査表」活用ガイド③

グラフの活用手順

【手順①】グラフから自校の傾向をみる



「魅力ある学校づくり」の考え方①「新規数」と「継続数」

●不登校児童生徒の取組には、「新規数に着目した取組」と「継続数に着目した取組」があります。それぞれによって取組の対象や主たる取組が異なるため、対応するチーム学校の構成員(「教員のみ」、「教員+専門職+関係機関」)も変わります。

不登校数減少に向けて	取組の対象	主たる取組	2つの「チーム学校」
新規数を抑制する	前年度不登校ではなかったすべての生徒	集団指導	教員の同僚性をいかした「チーム学校」
	上記のうち兆しの見えた生徒	個別支援	
継続数を減少させる	前年度不登校であった生徒	個別支援	教員に加え、SC、SSW 適指関係者等多職種による「チーム学校」

【手順②】傾向から自校の取組を振り返る

パターン①	□新規数 ■継続数	なし 増減なし	授業や学級づくりを通して居場所が作られているとともに、欠席が続くような児童生徒への「初期対応」の取組が有効であると考えられます。取組の成果を校内で共有し、対応の継続をしていきましょう。
パターン②	□新規数 ■継続数	なし 減	授業や学級づくりを通して居場所が作られているとともに、欠席が続くような児童生徒への「初期対応」の取組が有効であると考えられます。取組の成果を校内で共有し、対応の継続をしていきましょう。
パターン③	□新規数 ■継続数	増 減	欠席が続くような児童生徒への「初期対応」の取組について点検をしましょう。教職員の対応に加え専門家等の早期活用も検討をしましょう。
パターン④	□新規数 ■継続数	増 増減なし	欠席が続くような児童生徒への「初期対応」の取組について点検をしましょう。教職員の対応に加え専門家等の早期活用も検討をしましょう。

【手順③】調査から自校の取組の浸透度を把握する

●自校(学年)の全児童生徒に対する意識調査を実施し、結果より、自校(学年)の取組の浸透度を把握する。
※この調査は、自校(学年)の取組と児童生徒との意識のズレを把握するために実施するものであるため、必須ではないが効果はある。
※次の4つの視点を盛り込んだアンケート調査は、いじめアンケート等の項目に入れて実施することで、継続的な把握につながる。

ア 学校が楽しい
イ みんなで何かをするのは楽しい
ウ 授業に主体的に取り組んでいる
エ 授業がよくわかる

4件法
1 あてはまる
2 どちらかといえば あてはまる
3 どちらかといえば あてはまらない
4 あてはまらない

(別添)「欠席日数調査表」活用ガイド④ 備忘録の例

学校 第 学年 記入者

鉛筆書き、ア～エの項目について、それぞれの「あてはまる」の割合を%で記入する。

「あてはまる」と回答した子供の割合

意識調査項目

点検

ア 学校が楽しい

イ みんなで何かをするのは楽しい

ウ 授業に主体的に取り組んでいる

エ 授業がよくわかる

鉛筆書き、ア～エの項目のうち1～2項目を選んだ理由を書き留めておく。

こだわる項目に○(1～2項目)

理由(学年メモ)

鉛筆書き、設定しない場合は○をつける。

数値目標(学年メモ)

設定しない

設定する場合は、学年教員で協議し、その結果を10までの数値で記録する。(基本的には学年どまりの数値目標)

これまでの調査研究で得られた学年教員の共通理解のポイント

留意点

ア 何をもって学校が楽しいとするのか、学年教員で話し合いましたか

イ 楽しいと感じさせるのは行事中心か、授業までつなげるのか、話し合われましたか

ウ 主体的な取組には、居場所づくりより絆づくりが重要だと共有できていますか

エ 何を持って主体的とするか、共有しましたか、また、子供たちに示しましたか

ウ エを選んだ場合、ウからエへとつなげますか、それと逆、または同時ですか。

エ 取り組む内容は教科や担任に任せますか、学年で統一した取組を行いますか

学校 第 学年 ～ 月の取組

イ と感じる子供を増やす取組の強化 に向けた 学年メモ

次の意識調査までにどの月のどんなことを強化するのか。(新たな取組よりも浸透度)

行事における「絆づくり」

授業における「絆づくり」

9月

10月

11月

12月

修学旅行

ペア学習

グループ学習

修学旅行報告集会

参考 「居場所づくり」と「絆づくり」

全ての児童生徒の「心の居場所」となる学校

全ての児童生徒の「絆づくりの場」となる学校

教職員が、児童生徒が安心できる、自己存在感や充実感を感じられる場所を提供する【安心安全な学校づくり】

児童生徒が、主体的に取り組む活動を通し、自らが「絆」を感じ取り、訪いでいく【場と機会の設定】